河野仁 （号　桃雲） 陶歴

昭和　7 年 (1932 年)　愛媛県に生まれる
昭和 25 年 (1950 年)　京焼・清水焼業界にて上絵技法を習う
　　日本画を村山好生先生に師事
昭和 35 年 (1960 年)　京都上絵陶磁器展にて知事賞　以後、市長賞各賞を受賞
昭和 59 年度 (1984 年度)～平成 28 年度 (2016 年度)　京都市産業技術研究所にて技術指導を行う
昭和 61 年 (1986 年)　京焼・清水焼展にて大阪通商産業局長賞を受賞
昭和 62 年 (1987 年)　京焼・清水焼展にて市長賞を受賞
昭和 61 年 (1986 年)　京焼・清水焼伝統工芸士に認定される
平成　6　年 (1994 年)　京都市伝統産業技術功労者賞を受賞
平成 11 年 (1999 年)　第 41 回色絵陶芸展にて知事賞を受賞
平成 14 年 (2002 年)　第 44 回色絵陶芸展にて京都陶磁器協同組合連合会会長賞受賞
平成 17 年 (2005 年)　瑞宝単光章の叙勲に浴する
令和　1 年 (2019 年)　永眠

家族からみた人物像、職人として仕事に向き合う姿勢

仕事に関しては厳しい一面もありましが、普段触れる時は人当たりが良く、後輩の育成にも力を入れていたようです。
休日は、ほとんど釣りに出かけており、特に鮎釣りの季節を楽しみにしていました。毎晩のようにお酒を妻 (久惠) に注意されながら呑んでいました。お酒のことで注意されることも多かった人でしたが、妻ありきの人でした。内助の功という言葉がしっくりくる程、孫の目からみても、妻の存在は大きなものでした。
家族で食卓を囲む時には、戦時中の話、社会について、人づき合いについてなど色々な話をしてくれました。

職人として陶器に向き合う姿勢は、70 年程一貫して真面目に真摯に向き合っていたと感じます。早寝早起きが習慣であり、仕事場に着くと散歩に出かけ、毎日決まった時間に食事を取り、仕事をし、帰宅しました。若い頃は苦労したという話は何度も聞いたものです。